日英表現比較考（II）

——「英語らしい表現」への一考察——

小林永二*

A Comparative Study of Expressions between English and Japanese

—— in search of 'Englishness' ——

Eiji KOBAYASHI

はじめに

本稿では，日英両語の表現の相異について種々の角度からこれに肉迫せんと試みているわけであるが，日頃英語教育に携わる者の一人として，日英両語の表現上の相異を痛感させられるのは，やはり翻訳作業，特に英文和訳の際にその感が深い．勿論，和文英訳に於いても当然その相異を感じる筈のものであるが，如何せん和文英訳では，その翻訳者の実力に応じた英文しか書き表わせないわけであるから，その出来上った英文が多分に「和臭」を残したものである場合も多く，必ずしも，和文英訳の作業からだけでは真に「英語らしい表現」に触れ得るわけではない．その点，英文和訳の場合では，原文の英文が，教養ある英米人（つまりは native speaker の意である）によって書かれたものである限りに於いて，十分に「英語らしい表現」に満ち溢れた文章であることが期待されるわけのものであろう．その場合，一旦元の英文を直訳してみても，どうも日本語の表現としてはシックリしないと言ったケースが大半である．これはつまりは，それだけ元の英文の表現と，こなれた，普通の，ムリのない和文の表現との間には越え難いミゾのある事実を証していることに外ならない．

この事実を少し誇張して言えば，謂ゆる長文と言われる英文の中から，任意に一・二行程度の文章を切りとってみても，そこには必ず和文との表現上の差異が見られるわけなので，こうなると我々日英両語の相異について研究している者にとって，その研究の対象や材料には永久に事欠かないとも言える．その点，研究者としては恵まれているわけだが，しかし反面では，日英両語の表現上の差異が余りにも大きく深いが故に，そのミゾの細部をまで埋めつくすだけの語学力を身に付けることは至難の業でもある．

本稿では，先ず最初に，与えられた和文の英訳例を二ツ掲げ，日本人の間違いやすい英文訳と，真に正しい英語らしい訳文との比較を通して，日英表現上の微妙な差異に迫ってみたい．次に少しく具体的な用例について，主として文法的な側面から専門的に筆者なりの日英表現比較を行なってみたい．英語の諺に Example is better than precept. と言うのがあるが，これは百の説教より，一つの実例の方が優位にある事を述べたものと思

*英語英文学研究室（昭和61年9月22日受理）

われるが，誠に至言である．従って本稿では，出来得る限り，多くの実例・用例を掲げ，それらの具体的な比較を通して納得の行く比較研究を行いたいと思っている．

一口に英文例，和文例と言っても，同じ内容にして異なった style や語句を用いて，異なった文例で書くことの出来るものも決して少くはない．その事は当然過ぎる程当然のことではあるが，しかし以下の諸例では一応与えられた文例についてのみの比較に限定したい．つまり，その与えられた文例だけの比較でも十分に日英両語の基本的な差異の比較は為し得ると思うが故である．それでは以下に具体的な文例に基付いた日英両語の表現比較を少しく詳細に述べてみようと思う。

I．「日本人の間違いやすい」英文諸例研究

我々日本人が，特に和文英訳の際によく犯す誤ちは，日本語の表現や語法をそのまゝ英訳例の中に持ち込むことから来るものが数多い．考えてみれば，これはムリからぬ誤ちで，我々は無意識の中にこれらの誤ちを犯しているのである．

つまりどうしても元の和文の表現に引きずられて，和文の語法を英文の中にまで持ち込んで，そのまま気付かないのであろう．乳離れが悪いとか，他人の水に中々馴染まないとか言ってしまえばそれまでだが，確かに永年日本語の枠内だけで思考して来た者が，その語族・語系を全く異にする英語で文章を書くと言う段になっても，そんなに簡単にギアの切り換えがうまく出来る筈もなかろう．当然にも，その翻訳されて出来上ってきた英文に「和臭」が残っていて当然かも知れない．そこで本項では，種々の実例を通して，日本人がどのような間違いを犯し易いのか，つまり日本語を母語とする人間であれば，どのような箇所にミスが頻出するのかを知り，それらの研究を通して日英両語の間に横たわる表現・語法上の相異を改めて解明してみたい，〔以下，各英訳例の終りにある（F）＝False（偽），（T）＝True（真）の意である〕

（1）　あなたの故郷は何処ですか？

a.　**Where** is your hometown？（F）

b.　**Wha**t is your hometown？（T）

※（a）が必ずしも誤まりであるとは言えないが，この和文の訊いているのは，故郷の町の名前と考えられるので，（b）の方が正しい．「**どこの**駅で電車を降りるのですか？」なども**What** station do you get off at ？であって，where だけならば使えなくもないが（但しその場合は文尾の at は不要），後に station なる名詞が来れば，where が使えないのは自明の理で，当然にも what 或いは whichを使う．

（2）　あなたはそれについてどう思いますか？

a.　**How** do you think of it ？（F）

b.　**What** do you think of it ？（T）

※これもよく日本人の間違える典型例で，「**どう**思うか」の「**どう**」に惑わされて How と使ったのであろうが，how はあくまでも「方法」を表わすのが原則であって，ここでは，やはり what が preferable である．同義の表現に，What do you say to it ？があるが，これもやはり，What が用いられるのが普通で，How は用いられない．但し，「それを日本語で何と言いますか？」の意の，What do you

call it in Japanese ？は，How do you say it in Japanese ？と言うことはあるようだ．

なお，品詞の面から見れば，what は形容詞で，how は副詞と言う見方も成立する．何れにせよ，この辺りは一概に言えぬ問題を残してもいる．

（3） もう寝る時間ですよ．

a. It is high time you **slept**. (F)

b. It is high time you **went to bed**. (T)

※これもよく引っかかりやすい問題だ．「寝る」という日本語は曲者で，つい sleep を使いたくなるが，ここの和文に対する英訳例では，やはり「床に付く」の意の go to bed を用いるべきである．なお， went to bed と過去形になっているのは，high time 「潮時」が用いられて，仮定法が成立しているからである．

（4） 自己紹介させて頂きます．

a. Please **make** me introduce myself to you. (F)

b. Please **let** me introduce myself to you.(T)

※これもよくある例で，日本人としては迷う所だ．同じ「使役」動詞と言っても，(a)の make は本人の意志とは関係なく，「強制」を伴なう使役であり，(b) の let は「許可」を表わすもので，allow me to ～のように考えればよい．何でも「～させる」とくると，make を使うわけではなく，「知らせて下さい」なども，let me know であって，make me know ではない．

（5） 彼女はいつも厚化粧をしている．

a. She always **puts on** a heavy make-up. (F)

b She always **wears** a heavy make-up. (T)

※ put on は「動作」を表わし，wear は，「状態」を表わす．この「動作」と「状態」の違いは重要なことであるが，更に我々日本人にとって困る事実は，日本語が主として「動作」に重きを置く表現を多用するのに対して，英語ではむしろ「状態」や「結果」の方に重きを置く表現の多いことだ．「今すぐそちらに参ります」なる和文も，I'll **go** right over there.ではなくて，I'll **be** right over there. の如く，動作動詞の go ではなく，状態動詞の be を用いるのが，普通である．

（6） すみませんが，お電話貸して頂けませんか？

a Excuse me, but will you **lend** me your telephone? (F)

b Excuse me, but can I **use** your telephone? (T)

※和文の「貸す」は私を主語とすれば「借りる」の意ともとれるから，borrow を使って，may I borrow your telephone のようにも表現出来そうだが，いずれにしても，この場合の電話は貸借関係のそれではないので，use 「使用する」を用いる方が好ましい．なお，英語に rent なる語があるが，これは，「賃貸する」と「賃借する」の両様の用い方があることを附記しておきたい．

（7） そこへはどう行けばよいか教えて下さい．

a. Will you kindly **teach** me how to **go** there? (F)

b. Will you kindly **tell** me how to **get** there? (T)

※「教える」を teach と機械的に憶えているのは危険である．teach は，instruct なる語の意に近く，或る「技能」などを教えるのであって，道などを教えるのは，tell ないしは show （この場合は，単に口だけで教えるのではなく，指で示したり，実際に「案内」したりするの意）を用いる．更に（a）の how to go there の go は，ここでは，むしろ「到着する」や「到達する」の意と考えて， get を用いるのがよい．

（8） 出かけるまでまだ十分時間があります．

a. We still have plenty of **hours till** we leave. (F)

b. We still have plenty of **time before** we leave. (T)

※英語の hour なる語は，普通数詞と共に用いられ（Ex. a couple of hours, etc.）更に「営業時間」のような，特定の時間に関する表現に用いられる．(Ex. Business Hours) 時間がある， ないのような場合の時間は time である．更に「～する**まで**」の「まで」は till ではなく，before とするのが，この文脈（context）では正しいのであって，これなども日本人の最も間違いやすい箇所と言えそうだ．

（9） このシャープ・ペンシルは値段が高い．

a. The price of this **sharp pencil** is expensive. (F)

b. The price of this **mechanical pencil** is high. (T)

c. This **automatic pencil** is high in price. (T)

※これも中々穿った問題だ．先ずは日本語で使われているカタカナ外来語の「シャープ・ペンシル」はどうやら和製英語であって，正しい英語では，mechanical pencil or automatic pencil と言う．このように数多いカタカナ英語の中には，かなりの数の和製英語が混在しており注意を要する，因みに外に少し典型的な和製英語を挙げ，その正しい本来の英語を書いておく．括孤の中の英語が正しい英語である．

(i) エンゲージ・リング (engagement ring)
(ii) シーズン・オフ (off season or out of season)
(iii) サイド・ブレーキ (hand brake)
(iv) サイド・ビジネス (sideline)
(v) ダンプカー (dump truck)
(vi) ハッピー・エンド (happy-ending)
(vii) ハイセンス (good sense)
(viii) ガードマン (guard or watchman)
(ix) テレビ・タレント (TV personality)
(x) ドアボーイ (doorman)
(xi) ジェット・コースター (roller coaster)
(xii) パインジュース (pineapple juice)
(xiii) ホーム・ドクター (family doctor)
(xiv) レイン・シューズ (rubber shoes)

(xv) コール天 (corduroy)
(xvi) トランプ (cards, なお trump は, trump card とも言い, 「切り札」の意)
(xvii) フライパン (a frying pan)
(xviii) フロント・グラス (a windshield 米 or a windscreen 英)
(xix) カンニング (cheating)
(xx) バックミラー (rear-view mirror)

なお, (a) の文は price が主語となった場合, expensive を補語としては使えない. expensive はそれだけで, 「値段が高い」の意であって, priceが主語の場合は, (b) の場合のように high で受けなければならない. 或いは (c) のような分解的表現を用いた文も可能である.

(10) 彼の父は太平洋戦争で死んだ.

a. His father **died** in the Pacific War. (F)
b. His father **was killed** in the Pacific War. (T)

※これはよく起り得るミスで, つまり日英両語に於いて動詞の態 (voice) が異なる事実から来るものである. 一般に日本語で能動態 (active voice) で表現されているものが, 英語では受動態 (passive voice) となるケースが多い. その逆のケースも無きにしも非ずだが, 数としては断然少い. 例えば, 「このナイフはよく**切れる**」は英語では, This knife **cuts** well. となり又「この本はよく**売れる**」は, This book **sells** well. 等がその例である.

さて元へ戻って, 本文例のようなケースとしては, 「交通事故」で死ぬような場合も, 同様に be killed in an auto accident のように英語では言う. この日英両語に於ける態 (voice) の相異の問題は余りに数が多く, その遂一をここで詳述出来ないが, あと二, 三の例だけ挙げておく. 「彼は**ひどい怪我をした**」は, He **was badly injured**. となり, 「彼は中国語の研究に**没頭している**」は, He **is absorbed** in the study of Chinese. であり, 「彼の車は市役所の前に**停めてある**」は, His car **is parked** in front of the city hall. となる.

(11) 今度の日曜日は御都合如何ですか?

a. Are **you** convenient this coming Sunday? (F)
b. Is **this coming Sunday** convenient to you? (T)

※これもよくあるミスの一つである. つまり, (a) では人間が主語に立っているので, convenient なる形容詞は使えないので, free にでもするしかない. (b)では主語は人間ではないので, convenientの使用は可能である. 今度は逆に, 人間を主語にする場合にしか用いられない形容詞もあるわけで, 例えば, sorry, happy, glad, afraid, careful, etc. であり, 逆に無生物体・抽象名詞主語の場合にしか用いられない形容詞の例としては, 上例の convenient をはじめ, impossible (但し, これは若干の例外があり, She is impossible. と言うと, 主に口語体で「彼女には我慢がならない」などの意となり, 本来の意味とはすこしくズレが生ずる), necessary, important, interesting, satisfactory, difficult (実はこれも人間を主語としてとる場合もあり, そうなると本来の意味と少しズレて, Some customers are difficult. となると, 「客によっては扱いにくい客もいる」の意となる) 等

が挙げられる．

(12)　彼は日本古代史を専攻しています．

a.　He majors in **Japanese ancient** history.（F）

b.　He majors in **ancient Japanese** history.（T）

※これも微妙な問題だ．一般に形容詞を羅列する場合，その形容詞の性質に応じて或程度の並べ方の順位が存在するだろう事は容易に想像される．だが実際の場面で，色々似通った種類の形容詞などが連続して現われる場合などは，その並べ方の順序に戸惑うことも大いに有り得るわけだ．ここでその詳細について述べる余裕はないが，とにかく，上例の場合では，一応(b)のような表現をとるのが英語では普通である．さて日本語の場合では如何になるのか？どちらも言うようだが，頻度（frequency）としてはどうなのだろう等の疑問も湧く．而も，これは日本語と言っても，漢語を用いての表現であって，その点は割引いて考えねばならないが，何れにせよ**中国語の立場から見ると**，どうやら日本古代史の方に軍配を上げたいところだ．

(13)　今年の夏は，北海道へ行くつもりです．

a.　I'll go to Hokkaido **in this summer**.（F）

b.　I'll go to Hokkaido **this summer**.（T）

※これはどうこう言う程の問題では本来ないのだが，意外と間違う学生が多い．その一つの原因は，やはり日本語で，「今年の夏**は**」とか，「今年の夏**には**」と言ったように，助詞を入れて考えているから，それを英語に直訳することから来るミスであろうと思われる．「**今朝は**大変寒かった」などの日本語も，It was very cold **in** this morning. などのように，不必要な前置詞のinを入れて書く学生が跡を絶たない．これなどは謂わば，初歩的なミスと言えるものだが，たゞ英語の前置詞の用法と言う段になると，これはどうも一筋縄では参らぬ誠に厄介な問題であって，「一週間後に又その事について話し合いましょう」なる和文で，「一週間後に」のところは，after a week ではなくて，**in** a week となり，全体として，Let's talk it over in a week again. となるわけである．

(14)　淀川へ釣りに行こう．

a.　Let's go fishing **to** the Yodo River.（F）

b.　Let's go fishing **in** the Yodo River.（T）

※前問同様の前置詞に関する日本人の間違いやすい典型例と言える，日本人の場合は，「淀川へ」の「へ」にとらわれて，to を用いたのであろうが，これは一つには，日本語では，動詞中心の叙述が多く，その結果，或る現象について考える場合，その現象を動的にとらえて，その動作のプロセスそのものを dynamic に描写しようとする．それに反し，名詞中心的叙述の多い英語では，物事の「動作」や「過程」ではなく，その「状態」や「結果」を静態的，図式的に描写しようとする．従って上例の場合も，淀川まで出かけて行く過程はどうでもよくて，「淀川**で**釣りをする」と考えると当然にも前置詞は in となる．「公園へ散歩に出かけよう」なる和文も，公園へ着くまでの途中の叙述はどうでもよくて，結果として「公園**で**散歩する」と言う面だけを強調して叙述するのが英語的な描写の仕方であるから，この場

合も当然に，Let's take a walk **in** the park. となるのであって，to は使われない．

(15) 学校が終った．

a. School **was** over. (F)

b. School **is** over. (T)

※これは日英両語の時制（tense）の用法に相異のあることを証した例で，よくあるミスである．それでは何故斯様な差異が生じて来るのであろうか．一つの有力な原因としては，先述もしたが，日本語の叙述が「動作」の面を特に強調して描写するために，結果として，動作動詞が多用されることになる．本文の例でも，日本語の方は，「終る」と言う動作動詞が使われているのに比し，英語の方は，「状態」に重きを置いた表現であって，当然の如く，状態動詞である be 動詞が使われている．動作動詞を使うと，動作が完了した以上，一応過去形なり，何らかの完了形を使わざるを得ないのだろうが，状態動詞であれば，別に現在形であっても特に問題はない．その辺りの事情が，日本語的発想では(a)の如く，過去の動詞を用いる理由の一端となったのであろう．外にも，日英両語でテンスのくい違う例は多々あるが，今思い付く典型例としては，例の「バスが**来た**よ」のそれがあり，正しい英文では，Here **comes** the bus. の如く，動詞の tense としては，現在形が用いられている．この辺りになると中々むずかしい問題を含むようだ．

(16) 日本は四つの主な島から成る．

a. Japan **comprises of** four main islands. (F)

b. Japan **comprises** four main islands. (T)

※これは中々むずかしい問題だと言えよう．余程普段からこまかく英文を注意して見ていないと，正確な英文が書けない良い教訓ともなる文章だ．この場合，日本文からの推測は一切無効だ．「四つの主なる島から」の「から」にとらわれて from なり，of なりをつけたくなるのであろうが，この場合はムリだ．同義の表現として，consist of があるが，この場合は of が必要である．この方が日本人には分り易い．つまり comprise は他動詞であり，一方 consist は自動詞であるのがその理由だ．つまり日本語の動詞はその大半が自動詞から成り，従って自動詞構文が和文としては圧倒的に多い．それに比し，英文では他動詞が頻繁に用いられ，結果として他動詞構文（例えば，無生物主語や抽象名詞主語の構文などがその典型例）が数多く見られる所以である．「**日本海には**種々雑多な魚が**生息している**」なる和文に対して，Various kinds of fish **inhabit the Japan Sea**. なる英文を見るに，日本人としては，どうしても the Japan Sea の前に，in なる前置詞がほしいところだが，しかしこの inhabitなる動詞は，本来他動詞であって，前置詞をとらず，目的語たる名詞と直接に結び付くのである．これなどは，やはり英語に於ける他動詞の多用性をよく認識しておく必要を痛感させる好例と言えよう．

(17) 彼は母親に似ている．

a. He **resembles to** his mother. (F)

b. He **resembles** his mother. (T)

※これは前例にも述べた前置詞使用の有無に関するものだが，resemble は，完全他動詞であって「～に似ている」の意であり，to は必要ない．日本語の「に」に引きずられて to を付けたくなるところだが，気を付けたい．更にこの事実に関連して最もミスの目立つ例が，「～について議論する」の discuss だ．「その問題について議論を交わす」という和文表現に対して，discuss **about** the matter と書く学生が数多くいるが，勿論これは間違いで，about は不要である．何故なら discuss は完全他動詞であって直接に目的語をとるからである．外にもこのような例をさぐって行けば，いくらでも出て来るものと思われる．「私と結婚してくれますか」も，Would you marry me? であって，marry の後に前置詞は不要である．

(18) 彼のカメラに比べると，私のカメラの方が安い．

a. Compared with his camera, mine is **cheaper**. (F)

b. Compared with his camera, mine is **cheap**. (T)

※これも紛らわしい問題の一つであると言える．つまり compare「比較する」なる語が使われている文章の中では，更に比較級を用いる必要はないので，原級でよい．

(19) 彼は大阪を発って空路東京へ向かった．

a. He **started** Osaka for Tokyo by air. (F)

b. He **started from** Osaka for Tokyo by air. (T)

※これもうっかりミスをしかねない問題だと言えよう．やはり日本語で「～を出発する」と言う場合が多いので，つい from なる前置詞を落して仕舞い勝ちなのもムリからぬところだが，start の場合は是非共 from は必要だ．逆に leave を使うと from をつけてはならないので，「大阪を発つ」は leave Osaka となる．この辺りが微妙なところで，start は自動詞で leave は他動詞であるが故に斯様な差異が出る．

(20) 彼は東京のとある小さな大学を1942年に卒業した．

a. He **graduated** a small college in Tokyo in 1942. (F)

b. He **graduated from** a small college in Tokyo in 1942. (T)

※これも前例と関連した問題だが，graduate が自動詞であれば，当然に前置詞（この場合は from）が必要となるわけである．たゞ，graduate には他動詞の用法もあり，その場合は，be graduated from ～の如く受身にする．いずれにせよ，前置詞の from は欠かせない．これもよく学生のやるミスの多い典型例の一つである．

Ⅱ．「英語らしい表現」具体例研究

(1) "You were lovely," he said.

"**Truth**?" she said.

"**Truth**," he said.

〔「君は可愛いかったよ」と彼は言った．「本当？」と彼女は言った．「本当だよ」と彼は言った）何とも変哲もない会話文なのだが，こゝで気を付けたいのは，Truth の部分

である．普通に考えると，こゝは True なる形容詞が使われる様に思われるところだが，名詞の Truth を用いることで，「本当にそうなのか」と言った気持が強調されてくる．表現力としては何と言っても名詞の方が形容詞より強力だ．この辺りに謂ゆる「名詞表現」なる英語表現上の一技法の真骨頂が存する．よく味わいたい表現である〕

（2） "Okay, now get out of **that bathrobe thing** and put on some of your oldest clothes."
〔「よろしい，ではその化粧着とか言う代物を脱いで，よく着こなしている例の服を着なさい」こゝでは，that bathrobe thing の表現，特に thing なる語の使い方が面白い．類似の語に "stuff" がある．American colloquialism には "bit" なども同様の用法で用いられる．漠然と種類を問わず，一般的に「物」や「代物」などの意を表わす〕

（3） **Front!**
〔「フロントへ来なさい！」これはホテルなどのフロント係がボーイ（これは正しい英語ではなく，米語では a bellboy とか a bellhop などと言い，英語では porter と言う）を呼ぶ場合の例である．ところで，これは例の一語文（one-word sentence）であるわけだが，御存知の如く，日本語ではこの一語文の表現は諸々の理由から馴染まない．勿論日本語に一語文が皆無だなどと言うのではない．たゞ日本語自体の文法的性格や語法，表現の形式や様態，更に日本人の communication の型や心理が敬語体，特に丁寧体を多用する性癖がある為に，中々この簡潔明快な一語文をとりにくい事情がある．ところで，例えばこの "front" なる語の品詞は一体，名詞なのであろうか，それとも副詞なのであろうか．辞書の上では，frontには名詞もあれば副詞もある．更に実際にはこの "Front!" なる語は，辞書では間投詞（interjection）として品詞の区分がなされている．つまり語の形態だけからは品詞の区分を知る手立てはない．その語が文中でどの様な働きをしているのか，他の語との統辞関係は如何であるか等々の事情を考慮に入れないと，その語自身を文や他の語と切り離して独立に論ずることは出来ないのである．更にこの front なる語には，辞書の上で形容詞としての品詞区分もあり，例えば「ホテルのフロント」の意で the front desk などと用いる．ただし，この front は形容詞としては，限定的用法（attributive use）にしか用いられぬ様であるが，そうなると，front は果して形容詞なのか，それとも名詞が形容詞的に用いられたものなのか等の疑問が湧いて来る．後はこの語に比較変化が存するや否やも一つの決め手になるのであろうが，どうもその辺りもハッキリしない．斯くの如く，英語に於ける品詞の区分，特に名詞と形容詞の区分は必ずしも容易ではない．因みに，間投詞としての front には，軍隊などの号令で，「前へ向け！」などの意もあり，Eyes front! となると，「前へならえ！」となる．ところで日本語では，単に「フロント」と言っているが，英語では，the front desk であり，ホテルの応接係などは， a desk clerk と呼ばれるが，例えば，この deskなる語も，名詞用法のそれはすぐに理解出来るが， "a desk clerk" の場合の desk は，形容詞なのか，それとも名詞の形容詞用法なのかと言う段になると必ずしも明らかではない．つまり desk なる語の表面の形態変化は存在しないのであるから，単独にその語だけで品詞の認定は為し得ず，あくまでも文中に於けるその語の機能や，統辞関係から認定する以外には方法がないわけだが，その場合でも問題は残る．辞書の上での品詞区分も必ずしも絶対のものでない事は言うまでもない〕

（4）She was fixing a grilled cheese sandwich for Ezra because he hated **hospital cafeteria food**.

〔「病院のカフェテリヤの食事が嫌いだったエズラの為に彼女はグリルド・チーズサンドイッチを作ってやっていた.」この文章の中で面白い表現としては，hospital cafeteria food なる名詞が三つ並んだ，「N＋N＋N」型の複合名詞のそれである．日本語の訳では，それらの名詞の間に格助詞「の」が介在する．場合によっては，「病院のカフェテリヤで出される食事」の様に動詞を用いて言う場合もあろう．いずれにせよ，日本語ではこの場合英語に於ける如く，三つの名詞を何らの機能語を介在させることもなく単純に羅列させることには無理があろう．この様な例は実は数多く外にも見出せるのであって，逆の場合も有り得る．つまり日本語で（と言っても実は「漢語」を用いての意であるが）名詞の羅列，それも数語を越える羅列が可能である場合も有り得るとして，その場合英語ではとてもその様には出来ないと言った例もある．「大阪府警ラブホテル女性殺人捜査本部」などの様な長大な名詞の羅列を行なえるのは，むしろ漢語をフルに用いる日本語の方であって，英語ではそれ程の名詞の羅列は少し無理であろう．孤立語たる漢語の面目躍如と言った所だ〕

（5）I'm **a chain coffee drinker**. I like it **black and hot**.

〔「僕は絶え間なくコーヒーを飲んでるんだ．それもブラックで熱いのを飲むのが好きなんだ」こゝでの面白い表現は言うまでもなく，a chain coffee drinker である．タバコをひどく喫う人のことを a chain smoker と言うが，コーヒーなどの場合にも上例の様に使えるらしい．これなども三つの名詞が羅列されているわけだが，それよりも表現の中心が名詞に置かれ，動詞は単に be 動詞が copula としての役割しか演じていない．つまり英語では名詞が重く，動詞に軽い表現形式になっているのである．日本語の場合は正にその逆と考えてよかろう．つまりこの例文も典型的な英語名詞表現のそれであるが，日本人でこの様な表現を全く前もって知ることなく言えるかとなると少しムリであろう．a chain coffee drinker などの発想そのものが日本人には出てこないとも言えるのではないか．次に後半の I like it black and hot. なる英文も極めて簡潔で，特にblack and hot なる補語が効いている．この辺りも日本語の表現とは異るところで，日本語では助詞などを用いて副詞的に動詞を修飾して行く型をとる．或いは，格助詞「の」を使って「熱いの」の如く体言化して用いる法もある〕

（6） She was greeted by **a small dumpling of a woman** in a spotless white apron.

"Yes, Mademoiselle ?"

〔「はい何でしょうか，お嬢さん？」彼女は染み一つついていない白いエプロンを着けた小さな団子の様な婦人によって迎えられた」この例文の中で面白い名詞表現と言えるものは，a small dumpling of a woman の箇所であろう．「小さな団子の様にコロコロ肥った婦人」の意を表わすのにこの様な表現形式をとり，必ずしも例の直喩（simile）の形をとって，as なり like を用いてする型のものとは違った，それよりも直截的な表現形式であるとも言えよう．気を付けて英文を見ていると，この型をとった，つまり名詞を中心に据えた形容詞の働きをさせる表現の形式はよく見受けられる．この「名詞＋ of ＋ a ～」型が形容詞に代用される場合，上例の様に，「～の様な～」と訳する場合と，必ずしも

「〜のような〜」と訳さずに，単に「あの〜の〜」と訳せば済む場合もある．例えば，that idiot of a man 「あのバカな男」などである．次に，身に付けていることを表わす前置詞 in にも留意したい．日本語では動詞が必要なところだ．最後の "Yes, Mademoiselle ? " なる簡潔な物言いも如何にも音声面で表情豊かな英語の性格が見られ，この場合，intonation や声の表情，調子などが大きな働きをしているのである〕

（7） An FBI special agent walked over to the man and said, "**Identity papers.** "

〔FBI特別捜査官はその男の方へ近付いて行くと，「身分証明書を見せて下さい」と言った．ここの例でも，英語では単に，"Identity papers." の如く名詞がぶっきら棒に投げつけられた表現形式をとっているのに比し，日本文の方では文章体をとり，動詞なども使われている．日本文での一語文の使用には，自ずと限界があるようだ．英語の場合は，音声面の役割がその communication の中で占める比率は，日本語の場合よりも遥かに高く，その分だけ余計な機能語や，又は文形式などをとる必要がなく，単に文意の中心となる，特に名詞などを brusque にぶつけるだけの形の表現で十分に文意が通じることになる．例えば上例の場合も，rising intonation で言えば，若干丁寧な遠慮した言い方となるが，これを falling intonation で言えば，詰問調の如何にも相手を犯人ときめつけたかの如き険のある言い方となる．斯様に英語と言う言語は極めて音声面で「表情豊かな言語」なのであり，どちらかと言うと紋切型（stereotype）の物言いの多い日本語などとは大きく異るところがある．その事実が英語に一語文の多用を生み，簡潔で引締まった力強い迫力ある物言いを可能ならしめているのである．上例の場合，"Any identification ?" などとも言えるが，勿論その場合の与える印象の効果には相違のあるは言うまでもない〕

（8） I took her throat in both my hands and squeezed with what strength remained. **No warning, no caressing of the neck, no words, no nothing but a powerful squeeze.**

〔「私は両手で彼女の喉をとらえ，残された力をふりしぼって締めつけた．何の警告もせず，首筋を撫でもせず，何も言わず，たゞ力強く締めつける以外には何もしなかった」この英文の後半の部分の描写が如何にも punch の効いた英語らしい名詞表現の連続となっている．「no 〜」の型が連続して現われ，最後に no nothing の型が現われる．いずれにせよ，すべて名詞の型をとり，それらが何らの機能語を伴なうことなく並列され，無駄のない配置となって引締まった迫力ある緊張感をかもし出すことに成功している．日本語の訳文の方を見てもらえばよく分るが，動詞や助詞・助動詞といった附属語の助けを借り，文章体に近い形式の極めて冗長にして緊迫感を欠いた表現となっている．この辺り，日本語でももう少し緊迫感のある引締まった表現が出来ないものかと思われるのだが，どうもそうなると英語の様に名詞表現を採らざるを得なくなるわけだが，その辺りがやはり日本語の語法や，統語および形態変化上の関係などからむずかしい場合もある様で，上例の様な訳文となって何とも締らない結果に終ってしまった様である〕

（9） He is **a spaceman**.

〔「彼は宇宙飛行士だ」とでも訳せるが，この場合 a spaceman と言うのは，an astron-

aut「宇宙飛行士」と訳したのであるが，実は a spaceman には外にも，「宇宙研究者」や「宇宙人」などの意もある．一体これはどう言うことかというに，英語の spaceman は多義語で，日本語の尠くとも三つの異なる語義をその中に含み持っている．逆に日本語（と言っても実は「大和コトバ」ではなく「漢語」から成るそれであるが）の場合は単義語から成るコトバを用いて spaceman なる一語に3語を振り当てゝいる．この問題は実は，「和語 vs 漢語」の対立の場合にもよく起る現象で，一般に和語には多義語のものが多く，漢語には語義の狭い，少義語ないしは単義語のものが多い．この事は，語の体系性と言った問題とも多少関連するのであり，一般に英語の様に多義語を用いた方が語の体系性が確立しやすいが，漢語の様な少義語を多用すると語の体系性がそこなわれやすい．たゞその問題とも多少は関係もあるだろうが，例えば上例のspacemanの場合，「宇宙飛行士」と「宇宙人」と言うのは日本人の場合では全く関係のない異なった概念なり存在として捉えられているが，英米人の場合では必ずしもその様には見ていないので，もっと本質的な捉え方をして，両者の距離は日本人が考える程には遠くないのではないかと思われるのである〕

(10) Her clothes were wrinkled from **the long train ride**.
〔「彼女の衣服は長く汽車に乗っていたので皺だらけになっていた」これもやはり英語名詞表現の一種で，「汽車に乗っている」の部分が train ride の如く英語では名詞で表わされている．この例は多く，A good Samaritan gave him a ride back to Vail.「一人の親切な人が彼を自分の車に乗せてヴェイルまで連れ戻してやった」などの文でも ride は名詞に使われている．give ～ a ride の型で，「～を車に乗せてやる」の意となる．Give me a ride, will you?「僕を車に乗せてくんない？」の如くなる．なお，この場合，Give me a lift, will you? と言っても同様の意である．ところで一般的に言って，英語では，本来の固有の Anglo-Saxon 語やその他の北欧語などのゲルマン語系統の語には単音節の短く鋭い音の語が多く，それらの語はやはり又多義語も多く，V⇄Nと言った品詞の転用も比較的容易に行なわれる．つまり謂ゆる colorless verb が多いので，例えば，have, give, take, make, get, keep, do, go, run, put, set, turn, stand, come, look, lay, be, 等々がそれで，これらはすべて monosyllables（単音節語）であり，品詞の転用（functional shift）も可能で，動詞から名詞に容易に転用し得るのである〕

(11) I'd like **to wear the new shoes home**. Can you throw away my old ones?
〔「私はその新らしい靴を履いて家へ帰りたいと思います．私の古い方の靴は捨てゝおいて下さいますか」この英文で興味深い英語らしい表現と言えるのは，to wear the new shoes home の部分であろう．和訳の方を見てもらえば解るのだが，「新らしい靴を**履いて**家へ**帰る**」の如く動詞を二つ用いて，二つの語句が接続助詞でつながれている．それに比し英語の原文では，動詞は wear 一つしか使われておらず，接続詞も使われていない．日本人の感覚では舌足らずと言うか，何か物足りない感じがある．ところが英語の方では，home なるこの場合では補語の働らきをしているわけだが，この語が非常によく効いている．この様な補語の用い方によって簡潔な表現が可能となるのであるが，これは動詞多用にして接続詞や接続助詞を用いた複文・重文構造の多い和文に慣れた日本人には新鮮に映る表現だが，不慣れな，馴染みにくい表現であることも間違いない所だ．似た表現に

I'll drive you home.「家まで車でお送りしましょう」だの，Walk me home, will you?「家まで一緒に歩いて送っていただけますか？」などがある．〕

(12) **Indifference greeted White's violent death** because of his anonymity.
〔「ホワイトはその名も余りよく知られていなかったので，彼が変死した時も世間の注目を惹くことはなかった」最初にお断りしておかねばならないことは，この和訳の仕方は漢語をあまり用いないで，出来るだけ日本文としては，こなれた訳にしてあることだ．つまり漢語多用の生硬な（rigid）直訳調を避けたわけである．別に特別の意図があってのことではないが，ただこの様なこなれた如何にも和文調の訳にすると，原文の英文との対照がひときわ目立つ．日本人も昨今はかなり直訳の文体にも慣れ親しみ且又その様な謂わば生硬とも思える翻訳調の文体も日常多用している．特に少し堅い読物や論文調の文章にその様な文体が多く見出せる．この事の当否や是非などはこゝでは問わない．たゞ日本人が肩の張らない，日常のくだけた親しい者同志の間の communication の中では，余りに漢語を多く用いた翻訳調の文体などはやはり避けるであろうし，実際に又その様なものは多用されていない．この間の事情は英語の場合でもほゞ同様の事が言い得るわけではあるが，一般に英語の方が上例の如き抽象名詞主語の他動性表現が多用されるのは否めない事実であり，日本人にとってはその様な表現はやはり rigid な感じを与える〕

(13) For twelve days Britten **was kept under close surveillance without his knowledge.**
〔「十二日間に亘ってブリテンは，自分が厳しく監視されていたことをついぞ知らなかった」この例文なども英文と和文の特徴がよく出ていると言えよう．つまり英文の方はやはり名詞に表現の中心が置かれてをり，一方，和文の方は動詞を中心にした叙述的表現となっている．例えば，和文で「監視されていた～」の部分で，英文では was kept under close surveillance の如く，「監視される」の部分は，「監視の下に置かれる」の如く be kept under surveillance となり，「厳しく」と言う和文の連用修飾語は，英文では，「厳しい」の如く連体修飾語の形をとった close が使われている．つまり英語は名詞中心の表現である為，その名詞を修飾する語は必然的に形容詞となり，一方和文は動詞中心の表現である故，その修飾語は副詞的なものとならざるを得ない．更に文末の部分の without his knowledge も，英語では knowledge なる名詞が使われている．この部分は例の Nexus 構文とも言われる文法的 category に属するものだが，いずれにせよ，この原文の英文と和訳された日本語の表現との間には大きな違いがある〕

(14) "That's her" is **bad grammar.**
〔「"That's her "と言う表現は文法に適っていない」「文法に適っていない」の部分は，「文法的に間違っている」などとも訳せよう．いずれにせよ，英語の be bad grammar と言う表現とは異なっている．勿論日本語でも，「～は間違った文法だ」などと言えぬわけではない．こうなると若干英語の言い方に近くはなるが，その代り日本語としてはやはりこなれの悪い，ややぎこちない表現と言えそうである．これらの事実からも解る様に日本語ではやはり colorful verb を用いて，連用修飾語がそれと共に用いられる表現の型をとる．つまりそれだけ動詞の部分に文意の prominence が置かれるに比し，英語の場合では，動詞は be 動詞などの単なる copula の機能しか果さない謂ゆる colorless

verb を用いて，文意の prominence を名詞に置く．そしてその名詞を修飾する連体修飾語として形容詞を用い，「形容詞＋名詞」型の表現とする．それがこゝでの "be bad grammar" の由来ともなるのである．この様な英語の名詞中心の表現法は是非とも習熟して大いに活用したいものだ．因みに "That's her" なる言い方は，口語英語としては許され実際に使われている表現である．

ところで上例の bad grammar「形容詞＋名詞」型の表現に関連して，英語と日本語との基本的な表現の型の違いみたいな事について今少し立入って見ておきたいと思う．

つまりこれまでも幾度となく筆者は英語に於ける名詞中心的表現，名詞へと集約して行く表現の様態について機会ある毎に色んなところで触れてきた積りである．而して，一口に「名詞表現」といわれるものにも諸相に亘る varieties の存することも指摘してきた．それではその様な「名詞中心・名詞集約的」表現の文章の帰結はどの様なことを我々に教えてくれるのであろうか．例えば英語に於いて抽象名詞が主語に立つ文が多いということは，その結果の一つとして，名詞述語文ないしは形容詞述語文が多いということでもあり，この場合の動詞は be 動詞のような単なる copula （繋詞）としての働きを持つものしか使われない．この辺りの事情は日本語では正にその反対に，抽象名詞が主語に立つことが少く，具体的な物や人間などが主語に立つことが多い為，どうしても動詞述語文を作り易い．その結果は修飾語（modifier）としては動詞を modify する副詞（adverb）が数多く用いられることになる．それに反し，名詞・形容詞述語文の多い英語の文章では，副詞よりは形容詞の方にヨリ大きな prominence が置かれることになり，形容詞の多用，乃至は，「形容詞＋名詞」型の表現が多く見られることになる．上例の bad grammar なども正にその一例と言えよう．これを又別の角度より見れば，日本語は「用言止メ」の文が多いのに比し，英語の場合は「体言止メ」の文章が多いとも言えるのである．尤も語順の観点から見ても，英語の基本的語順は「S＋V＋O」型で，「体言止メ」となるが，一方日本語の場合の語順は比較の便宜上から言えば，「S＋O＋V」型のそれで，「用言止メ」となっている．実はこの表現法の差異，どの様な語を主語に立てるか，或いはどの様な観点からどこに力点を置いた表現をするのか等の事実と，その言語の語順との間には何らかの相関関係があるのではないかとも思われるのであるが，それを述べるとなると長くなるのでこゝではその問題には触れないが，興味深い問題ではある．

谷崎潤一郎の「文章読本」に，日本語には形容詞が少くて文章表現上不便であるとかの如き論が述べられていたかに記憶するが，日本語に於いて形容詞の絶対量ないしは相対量が果して本当に少いのか否かについては，数理統計的にその真偽の程は定かではない．たゞ筆者の上述の論に従って推論すれば，その様な事実もひょっとすると言い得ることなのかも知れない．ところで更に上例の bad grammar とも関連して気になることは，同じ形容詞といっても，その中味の語構成の問題をも考慮せねばならないのではないかという事である．例えば，bad grammar を「間違った文法」と訳すのと，「悪い文法」と訳すのとでは，この bad なる英語の形容詞をどちらも限定用法（attributive use）として日本語でも訳しているわけで，謂わば英語の表現法や語順に忠実に沿った訳し方をしているわけでもある．しかしその際の「間違った～」と「悪い～」との連体修飾語の中味の語構成の様態は明らかに異なっている．因に上の場合，これを「文法的に間違っている」の如く bad を叙述的用法（predicative use）の様に訳す方が日本語としてはヨリ自然であるわけだが，その問題と今問題にしていることとは話しが少し違うのでそのことについては論じない．さて「間違った～」と「悪い～」の語構成の問題に立帰ってみるに，「悪い～」

の方は，「悪い」という文字通り純粋な形の形容詞が用いられている．一方，「間違った～」の方では，「間違う」という動詞が活用して，それが「た」なる助詞に接続し，それが又全体として「文法」なる体言に接続して行くわけだが，いずれにせよ，「間違った」という語句は，なるほど連体修飾語として形容詞的な働きはしているわけではあるが，しかしその中味は極めて動詞的，叙述的傾向の強い性格を有しているのであり，その点「悪い」という純粋のかたちの本来の形容詞とは，語構成の面でも，その効果・働きの面でも両者には違いが目立つ．では筆者はこゝで一体何を言いたいのであろうか．それはつまりこれまでも筆者が述べてきた，英語に於ける名詞中心的表現の多用の結果としての形容詞の多用が一方に在り，他方，日本語の場合では，たとえ連体修飾語というかたちをとっていても，実は純粋なかたちでの本来の形容詞は少く，その連体修飾語の中味の語構成を調べてみると，それ自体は動詞を中心として形成され，それが助詞，助動詞等の附属語を伴なって体言へと接続して行くかたちをとっている．この様に考えてくると，日本語の場合，純粋の本来の形容詞に「連体形」と言う活用形は確かに存在するのではあるが，それは英語などの限定用法（attributive use）のそれ程には用いられていないのではないかとの推理が働く．現にこの項でとりあげた，"That's her" is bad grammar. の和訳として「"That's her" という言い方はまずい文法だ」というよりも，「"That's her" という言い方は文法的にはまずい」などと，形容詞を限定的に用いるよりも，叙述的に用いた方がヨリ自然な日本文になることからも想像がつく．因みに bad はここでは，「悪い」よりも「まずい」と訳した方がよかろう．とにかくこの問題をめぐっては色々の疑問が派生的に考えられてくるが，長くなるのでこの辺で止めて置きたいと思うが，諸士におかれても色々考えて頂きたい〕

（15） His face had **a three-day growth of beard**.

〔「彼はこの三日間ヒゲを剃っていなかった」とにかくこの英文は日本語に成りにくいものだ．先ず his face と言う物が主語に立つ，謂ゆる「物主構文」であることが第一の要因だ．次に a three-day growth of beard の如き表現，特に growth なる抽象名詞の用い方なども日本人には馴染みにくいものだ．最後に以上の結果としてこの英文は「S＋V＋O」型をとる典型的な英文の基本文型となっている．Vはこの場合言うまでもなく他動詞である．一方和文訳の方であるが，勿論その和訳の仕方には上の例以外にも種々の和訳が可能ではあるわけだが，しかし主語としては，この場合やはり物が主語に立つ様な和文はムリなのではないかと思われる，日本文としてはやはり人間を主語にするか，それとも「ヒゲ」を主語にして状況中心的な叙述にする事は出来る．つまり，「彼のヒゲは三日間伸び放題だった」等の表現である．こうなると和文でも一見物が主語に立つ文にはなっている様だが，英文のそれとの違いは，英文では他動詞が用いられているに比し，和文では自動詞構文となってをり，特に目的語などはとらず，英文の「S＋V＋O」文型に対し，単に「S＋V」文型の単純な型になっている点で，やはり日英語間にはその表現上さまざまの相違が存している様である〕

（16） She looks as if **butter would not melt in her mouth**, but in fact she is a bitch.

〔「彼女は虫も殺さぬ顔付きをしているが，実際のところはとんでもないあばずれ女なんだ」この butter would not melt in one's mouth なる表現は言うまでもなく謂ゆる id-

iom と呼ばれるもので，ここで例えば，butter なる語が出てくるところなどは，如何にも英語の idiom らしい．何んでも「西洋式」のことを称して，「バタ臭い」などと言うことから見ても，butter なる語は日本人には馴染みにくい，あくまでも西洋の産物である．どの様な語彙がその idiom の中で使われているかによって，特定言語の背後にある文化や社会慣習又はその言語を使用する民族なり国民の mentality を知る手掛りが得られる．その様な観点に立って英語の idiom を具体的に観察してみれば色々と面白い事実が浮び上ってくるのではなかろうか．英語国民がどの様な語彙を好んで日常その表現の中に用いているか，逆に日本人の場合ではどうかを色々と比較してみることで，日英文化比較のかなりの部分が成就されるのではなかろうか．因みに butter なる語の使用された idiom をあと数列挙げておこうと思う．

Ex. (i) The butter was laid on pretty thick.「かなりたっぷりとお世辞が言われた」
(ii) Butter her up at first.「最初は彼女を持ち上げておきなさい」
(iii) Fine words butter no parsnips.「いくら立派な事をコトバで並べてみても，それだけでは何んにもならない」
(iv) He had his bread buttered for life.「彼は一生楽に暮して行けた」
(v) She wants to butter her bread on both sides.「彼女は贅沢をしたがっている」

(17) Don't be **a dog!**

〔「卑怯なマネは止せ！」この英文の表現は色んな点から興味深いものがある．先ずはやはり「名詞表現」であることだ．しかもこれは例の隠喩（metaphor）と言ってもよく，a dog で「卑怯な奴」の意を象徴している．これで憶い出すのは，例のイソップ物語（Aesop's Fables）に出てくる "a dog in the manger"「ひねくれ者；意地悪者」なる表現だ．従って上例の英文は，Don't be a dog in the manger! とも言い換えられよう．いずれにせよ英語の idiom の中で "dog" なる語は頻出する．これはやはり英語国民の社会生活の中で「犬」が特別の役割を歴史的にも果しで来たのであろう．「犬は人間の最良の友」とか，A dog is a faithful animal. などとも言われるが，これらは日本人の社会生活の中に於いてよりも，英語国民の社会生活の中でこそ一層の迫力と実感のこもった響きがある．因みに以下に "dog" の用いられた idiom の諸例を挙げておく．

Ex. (i) Love me, love my dog.「坊主憎けりゃ，袈裟まで憎い」
(ii) a dog in the blanket「意地悪な人」これは上記の a dog in the manger とほゞ同様の意に用いられる．
(iii) die like a dog「みじめな死に方をする」他に同族目的語をとる表現を使えば，die a dog's death と言っても同義である．
(iv) dog eat dog「共喰；同類間の喰うか喰われるかの熾烈なたたかい」因みに Dog does not eat dog. は諺で，「盗人にも仁義」となり，There is honor among thieves. などとも言う．
(v) dressed like a dog's dinner「派手な服装をしている」
(vi) go to the dogs「だめになる，落ちぶれる，破滅する」
(vii) Let sleeping dogs lie.「寝た子を起すな」わざわざ余計なトラブルを招く様なことはするなと言うことで，他に「さわらぬ神に祟りなし」などもよ

かろう．

(viii) You cannot teach an old dog new tricks.「年をとった犬に新しい芸を仕込むことは出来ない」と言うのが原意であるが，結局は，犬ではなく人間について言っているので，年をとった，頭の固い老人に新しいものの考え方などは教えられないと言う事を述べているのである．

(ix) It rains cats and dogs.「雨がどしゃ降りだ」の意で，これは誰れでもよく知っている表現だ．他に「猫」と「犬」の組合せの成句として，lead a cat-dog life「夫婦がケンカばかりして暮らす」などがある．

(x) try it on the dog「劣ったつまらない人や物だけが不利になる様な試し方をする」

(xi) not have a dog's chance「ほとんど見込みがない」

(xii) put on the dog「見栄を張る，金持のふりをする」

(xiii) lead a dog's life「みじめな暮らし方をする」

(18) He is now **in the pink**.

〔「彼は現在とても元気だ」さてこの in the pink なる成句は colloquialism で，「とても元気だ，とても健康だ」の意を表わす．ところで pink と言えば，日本語では，「ピンク映画」などに見られる様に，何か「卑猥な」(obscene) 感を与えるが，英語の pink にはその様なイメージはない．「ピンク映画」のことは，御存知の通り，英語では "a blue film" となる．色に伴なう image は言語によってそれぞれ異なることは言うまでもない．〕

(19) She **turned white** with fear.

〔「彼女は恐怖で真青になった」これなども英語では turn white と white が用いられているが，日本語では「青」が用いられている．尤も，日本語でも，「蒼白」なる語があり，He turned pale.「彼は蒼白になった」などに使われ，この場合，「蒼白」と言うのは，「青白い」の意である．「白髪」のことは，英語でも white hair も可能であるが，gray hair とも言う．因みに，真青な顔色をしている状態のことを，as white (or pale) as a sheet などと言う．as pale as ashes (or death) などとも言う〕

(20) He is fed up with **yellow journalism**.

〔「彼は新聞などの興味本位の扇情的な書き方には辟易している」日本語で扇情的な興味本位の書き方をする様な新聞のことを，「赤新聞」などと言うが，英語ではこのところは，a yellow journal (or newspaper) と言う．その他 yellow は英語では，「臆病な」の image があり，He's a yellow guy.「彼は臆病者だ」などと言う．他に，「嫉妬深い」とか，「ねたましそうな」などの意もあり，She has a yellow look.「彼女はねたましそうな目つきをしている」などに用いる．なお，日本語で言う交通信号の「黄信号」は英語では，amber「琥珀色」が用いられるようである〕

(21) Obviously Chicago was not the only **bad egg** in the untidy national basket of the 1920s.

〔「明らかに，シカゴだけが，1920年代の乱れた全国的規模での腐敗した唯一の都市では

なかった」これなども，a bad egg なる metaphorical な名詞表現を用いたもので，やはり英語らしい面白い表現だと思う．a good egg 「善玉」，a bad egg 「悪玉」などと言えようか〕

(22) It is not knowledge, be it great or small, but **the conceit of knowledge** that misleads men.
〔「人々を間違った方向へ走らせるものは，それが大きなものであれ，わずかなものであれ，とにかく知識そのものではなくて，知識を持っていることへの自惚れである」こゝでは，the conceit of knowledge の部分にやはり名詞表現が感じとれる．この前置詞 of は属格ではなく，対格の of であり，こなれた日本語にすると，「知識を持っていることを自惚れること」とでもなろうか〕

(23) Most organized criminal acts cannot long **escape the notice of police**.
〔「大ていの組織的な犯罪行為がながい間警察に感知されないでいることは出来ない」この英文でもやはりポイントとなる部分は escape the notice of police で，escape the notice of ～の型で，名詞表現を作っている．この場合の前置詞 of は，対格の of ではなく，属格の of と見てよかろう．“escape” には自動詞・他動詞の両用法があるが，自動詞の場合は，escape from ～となり，既存の状態から脱出する意で，他動詞の場合は，「escape＋目的語」の型をとって，前以って，その様にならないようにする意に用いる〕

(24) The two boys worked **the night shift**.
〔「その二少年は夜勤で働いていた」これは言うまでもなく，例の名詞が副詞的に用いられているもので，この例は数多い．work **part-time**「パートで働く，work **full-time**「正常勤務をする」，travel **first-class**「一等で旅行する」，buy **first-hand**「直に買う」，get along **first-rate** together「仲が互いにしっくりいく」，drink coffee **vodka-fashion**「ウオッカを飲む様に一気にコーヒーを飲む」etc.があり，極めて簡潔な言い方で魅力的な表現だ〕

(25) **A constant speed** is good for **gas mileage**.
〔「一定のスピードを守って走行するとガソリンの節約になる」この例も又，英語と日本語の表現形式上かなりの差異を見せている．英語のそれはやはり名詞中心の静態的表現であり，日本語の場合は動詞中心の動態的表現となっている．勿論日本語の場合でも，漢語をフルに用いて，英語の表現に極めて近い名詞的表現も不可能ではないが，しかし本当にこなれた分り易い和文となると，当然に動詞を多用した動作の経過に力点を置いた叙述的描写となるわけで，やはり英語の表現とは異る〕

(26) The boy's face was **a mask of pure fear and bewilderment**.
〔「その少年の顔には，恐怖と困惑の表情が諸に浮んでいた」これもやはり a mask of pure fear and bewilderment の部分，特に mask なる語の使い方は面白い．つまりやはり「名詞表現」と言うことである．主語の部分で face を使っているので，その繰り返しを避けて，後の方では，mask を使ったのであろう．pure fear and bewilderment の部分も，こゝでの和訳は名詞的に訳しているが，もっとこなれた和文では，「恐怖」だの

「困惑」などと言った漢語を使わず，「恐れおのゝく」，「うろたえる」などと大和コトバで動詞的にも表現し得る．原文の英文の様な表現は native speaker でないと，日本人などには中々書けないところだ〕

(27) He tried to smile at **his reflection in the mirror** but **without success.**
〔「彼は鏡に映る自分の姿にほゝえみかけたがうまく行かなかった」これも名詞表現と言う問題につきるわけだが，例えば，日本語で「鏡に映る自分の姿」の如く，「映る」という動詞が使われているが，英語では，reflection という名詞の中に，「映る」の意も含まれてしまっている．名詞一語の中にすべて集約されてしまっていると言ってもよかろう．更に but without success の部分も中々簡潔に名詞表現でまとめている〕

(28) **What time** do you get up **every morning** ?
〔「あなたは，毎朝，何時に起きますか」これは何とも初歩の英語で申訳けない次第だが，しかしこの様な中学生の時に習った英語でも，それなりに問題点を探して行けば，それなりに興味深い事実が出てくるものだ．先ずは what time の部分だが，これは例の名詞が副詞的に用いられているものだが，日本人の感覚からすれば，「何時に」の「に」にこだわって，at なる前置詞のほしいところだ．それが証拠に，よく日本人学生で，every morning や every summer などの前に in なる前置詞をつける学生が後を絶たないが，これも漢語では，「毎朝」とか，「毎夏」などとやはり名詞が副詞的に使われているわけだが，従って前置詞の in が不要なことは解る筈なのだが，どうも一般の日本人の頭の中では，「朝に」とか，「夏に」などの「に」がこびりついていて，ついうっかり in なる前置詞をその前に付けるのだろう〕

(29) We climbed **all night**, and **the morning found us on the top of the mountain.**
〔「我々は夜通し登り続けた．そして朝になって山頂に着いていた」先ず all night の部分は又々名詞の副詞的用法である．次に後半部のところは，例の抽象名詞が主語に立つ他動詞構文となっており，極めてこの文の場合など英語的な表現になっていて，日本語では the morning を主語にとった他動詞構文などは少し考えも及ばぬ文章だと言えよう〕

(30) He was **a gorilla.**
〔「彼は与太者だった」これは例の隠喩（metaphor）と呼ばれる英語の修辞表現の一つと見てよかろう．つまり a gorilla は「醜い狂暴な男」を symbolize して使われているわけだが，これが俗語（slang）では，「不良，与太者，ならず者，悪漢」などの意に転化して用いられる．如何にも当を得た面白い表現だと言えよう．英語にはこの隠喩の外にも直喩（simile）と呼ばれる修辞法もあるが，直喩の場合は或る物にたとえて，「～の様に～だ」となるだけに逆に間接的な表現のように感じられるのに比し，むしろ隠喩の方が，ズバリ直截にそのものの性格を端的に喝破した表現法と言えよう〕

む す び

最後に，今一度「英語らしい表現」の要締について整理してみたい．自他の区別を明確にし，「主客の対立」を基本とする英語構文法に於いては，「主語」の文中に占める役割

の重要性は，日本語の場合のそれに比し，圧倒的に大きい．従って英文の場合では，何が，どのような語が主語に立つかで，その文の表現形式や様態が決定付けられる．和文に見る「～は」とか，「～が」更には，「～は～がどうである」（私は食欲がない＝I have no appetite.）等の表現に於ける，特に「～が」の部分に当る語が英文に於いてもやはり主語に立つのではとの憶測は，日英両語の基本構文法の相異を考慮に入れぬ軽卒な議論として退けられるであろう．この日英両語に於ける基本構文法の相異を知るだけでも，例えば，和文英訳などの際に大いに役立つものと思われる．而して，英語構文法の基本はあくまでも「S＋V＋O」のそれであり，その際の主語Sは，生物体（animate）or 無生物体（inanimate）の如何は問わない．Vについては，言うまでもなく他動詞であって，自動詞構文を基調とする和文との差異の見られるところである．

例えば，和文英訳に於いて，原文の和文の様態に必らずしも左右される必要はない．肯定を否定で言い換えたり，その逆の場合もあり，更に文体や，文の種類を変えたり（例えば，平叙文を疑問文にしたり，感嘆文にして言い換える等），更には原文の品詞を訳文では別の品詞を用いて表現する等して，ヨリ一層英語らしい文章に仕上げるなどの技法も身に付けたい．「そんなこと誰にも分りゃしない」なども，英文で Who knows? などの疑問反語の表現にしてみたり，「誰も気にしはしない」を Who cares? としたりする．「彼は金を払ってタクシーから**降りた**」を，He paid the cab **off**. とすれば，日本語の動詞の部分を英語では品詞を変えて言っていることになる．「騒音で昨夜は一晩中**眠れなかった**」も，The noise **kept me awake** all last night. とすれば，和文の否定表現が，英文では肯定表現で表わされることになる．

ところで英語はよく idiom の多い言語として知られている．極端な言い方をすれば，英語はすべて idiom から成っているとも言い得る程である．となると「英語らしい表現」の構成要素として，この idiom は不可欠のものであろう．そこで idiom の様態分折が必要となって来るのであろうが，これ又それだけで一冊の部厚い本が書ける程の theme であり，ここでは割愛した．英語に謂ゆる直喩（simile）とか隠喩（metaphor）等と呼ばれるものがあるが，これらも広義には idiom のそれとして取扱われるべきものであろう．日本語で「瓜二つ」と言うのを，英語では，上述の simile を用いて，as like as two peas などと言う．metaphor の例としては，「君は前途に横たわる困難を避けては通れないよ」を，You cannot bypass **a lion in the way**. と言い，a lion in the way が「前途に横たわる困難」を signify している．これら simile or metaphor を臨機応変に用いることで随分と英語らしい文章が書けるのではないかと思われる（勿論，その濫用は厳に慎むべきではあるが）．

更に英語 idiom の花形とも言えるものは，その質量共に動詞句（「動詞＋副詞」 or 「動詞＋前置詞」，更に「動詞＋副詞＋前置詞」等がある）にあると言ってもよい．これは実に尨大な数にのぼり，又その意味用法も複雑多岐に亘る．しかしこの英語 idiom，特にその動詞句の研究は，「英語らしい表現」を知る上で欠かせない．特に謂ゆる Americanism に於いてその現象が顕著に窺われる．例えば，この Americanism に於ける分析的表現を，上記の「動詞＋副詞＋前置詞」型の動詞句の中に少し探っておこう．

(i)　I don't **go in for** sports. ＝「私は趣味としては，スポーツはしない」

(ii)　You must **make up for** lost time. ＝「君は失った時間を取り戻さなければならない」

(iii)　She couldn't **put up with** his ill treatment. ＝「彼女は彼のひどい仕打ち

に耐えられなかった」

(iv)　They **did away with** that bad custom.＝「彼等はその悪い慣習を廃止した」

(v)　He **made away with** himself, leaving his wife and two kids behind. ＝「彼は妻と二人の子供を残して自殺した」

最後に，「英語らしい表現」と言うことになれば，当然にも，例の謂ゆる「名詞表現」というコトバが浮んで来る．この「名詞表現」については，筆者はこれまでにも色々な機会に詳述してきたので，本稿ではあまり論じなかったが，「名詞表現」が「英語らしい表現」の中核的存在に位置することは疑いを入れず，その意味でも，今一度ここで簡単にこれに触れておこう．

「彼女は合衆国に**行きたいばかりに**，そのアメリカ人と結婚した」を英訳して，She married the American **in her eagerness to go** to the United States. とした場合の，in her eagerness ～「～したいばかりに」のところに謂ゆる「名詞表現」が用いられているわけだが，これなども日本人には中々書けない表現の典型例だ．二つある物の中で，どちらか選ばせようとする時に，日本語で，「どちらでもお好きな方をお選び下さい」などと言うところが，英語では，単に名詞を投げつけて，"**Your choice.**" などと言う．日本語で，「また失敗だ，全くついてないなあ／」などと自嘲的に言う場合も，英語で，**Just my luck!** などとやはり名詞を用いた表現がある．「彼は全くのバカ者だ，**ほんとに間違いないよ**」の場合，文末でその前に述べた内容を確認する言い方に，英語の口語体で，He is a damn fool, **and no mistake.** などと言うが，これも例の「no＋名詞」型の極めて compact な英語らしい力強い表現を作っている．「俺は，酒も，タバコも，女も，何もやらないよ」などと言いたい時に，英語では，「no ＋名詞」型を連続的に使用して，"**No smoke, no wine, no dame, no nothing**" などと，極めて力強い印象的な簡潔表現としての名詞表現を用いる．

更に，「汽車が急にガタンと揺れた」なる和文表現は，The train **gave a lurch.** となり，「男より女の方が外国語を上手に話す」は，Girls are **better linguists** than boys. などと表現され得るが，よく味わっておきたい英語「名詞表現」の典型例である．

勿論，これらの「名詞表現」が謂ゆる「英語らしい」表現であると言っても，それはあくまでも，例えば日本語の観点からのそれであって，例えば，ドイツ語やフランス語の立場からはそれら「名詞表現」は，必ずしも英語にのみ特有の現象などでは有り得ない，大なり小なりそのような「名詞表現」は独仏両語に於いても，英語の場合同様，頻繁に散見され得る現象なのである．従って，これまでにも指摘した如く，或る特定言語の謂ゆる「らしさ」なるものは，決して絶対的な特徴や評価などをいうのでなく，あくまでも「相対的」なそれであることをここに再度確認しておきたい．ただその「らしさ」なるものを出来得る限り浮彫りするためには，相互に近しい関係にある言語を比較するのではなく，出来る限り遠い関係にある言語同志を対象としてとりあげる方が望ましいことは言うまでもあるまい．そこに本論文の主要テーマが日英表現比較考と名付けられた所以の存するところである．

附　　記

本稿のⅠ，「日本人の間違いやすい」英文諸例研究の部分に関しては，拙著，「現代教養英語読本」（白鳳出版社刊　増補版300頁）の第三章（p.46～p.66）の辺りを御参照頂きたい．本稿に挙げてある実例以外の興味深い諸例を通して，日英両語法間の微妙な差異

に関して，更に一層の認識を深められるものと期待する．更に第七章「英語に於ける感情表現の研究」の辺りも併読願えれば，人間の基本的な感情たる「喜・怒・哀・楽」に関する表現様態の中での日英語の差異の諸相を窺い知ることが出来よう．

本稿のII,「英語らしい表現」具体例研究の部分については，拙著「現代英語の語法研究」（泉屋書店刊　A5判430頁）の第一章および第二章の辺りを熟読願いたい．「英語らしい表現」とは何か，謂ゆる「名詞表現」が，各種「英語らしい表現」と言われるものの中でどのような位置を占めているのか等を知り得よう．英語 idiom の項目としては，第一章の〔XI〕英語 idiom の諸相（p.44～p.52）乃至は前書の第四章「興味深い英語 Idiom 考」（p.67～p.102）の辺りを御参照願いたい．なお，実践「和文英訳」（p.372～p.410）の部分に対する，Instructor's Manual も併せて御参照願えれば幸甚に存ずる次第である．

Summary

There are some grammatical mistakes most Japanese learners of English are likely to make in writing English. And it is only after through the study of them that we can bring home to ourselves the difficulties of translating English into Japanese or the other way round. It follows that there must be far more differences between English and Japanese than we can imagine. Paradoxically enough, a close examination of English written by non-native speakers of English still confined to their own way of thinking, diction, etc., etc., will help us write correct English.

Furthermore one thing we must keep in mind in translation is that English and Japanese are both hybrid languages. They have both been greatly influenced or even modified by foreign languages which were, when first introduced, thought of as more sophisticated in many ways than their own.

In this connection, it is not too much to say that Chinese is to Japanese what Latin or French is to English. In the process of translation, too much attention cannot be paid to the hybridism of English and Japanese particularly when Japanese is translated into English, for generally Chinese borrowings, of which contemporary Japanese is full, are more difficult to translate into English than indigenous Japanese is.

The reason for it is that Chinese is generally more easily translatable into English than Japanese is beacause of its grammatical affinity to English.

As for the so-called 'Englishness,' it has, in itself, diverse or even inconsistent factors because of its hybridism, that is, a mixture of Anglo-Saxon and Latin or French. To clarify what Englishness is really like, this Latin or French influence on English must be dwelt on. The same is true of 'Japaneseness in its age-long relationship to the Chinese language.

In conclusion, a comparative study of English and Japanese cannot be made to the full without due reference to Latin or French influence on the former and Chinese influence on the latter, for both English and Japanese are, as stated before, hybrid languages which it is, at this stage, next to impossible

to turn back into each vernacular in its entirety. In terms of phraseology and style, the overuse of honorifics in Japanese is the key to differentiate Japanese from English. In that sense, it can roughly be said that 'redundancy' is the essence of 'Japaneseness,' while 'terseness' the essence of 'Englishness', leaving the door still open for further controversy.